
GAME（ゲーム）～神々の遊楽～

間入糅管

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G^{ゲーム}AME～神々の遊樂～

【Zコード】

N2128Y

【作者名】

間入糸管

【あらすじ】

主人公は今年の春、高校生となつた。高校の寮に住むことになつたが特に嫌という訳ではなく、ホームシックにもならなかつた。しかしある日、実家に帰り、ノベルゲームをする。その時、主人公は「ゲームみたいに日常にも選択決とかがあれば、すっげー楽なんだけどな～」と考え始める。

そしてその日の夜、おかしな夢を見る。変に思いながらも、朝起きてみると

?

プロローグ（前書き）

プロローグ短っ！と思ひながらの投稿。
許してくださいお願いします。できれば音で頂けたらな、と思いま
す。

プロローグ

（クソシ、この場合どうすればいい。どの選択決を選べば最高のイベントシーンに行けるんだ！）

この心の声を聞いただけでは、パソコンの前でノベルゲームをやつてるようと思えるだろ？ だが、実際は違う。青年には見えていた。青年の目の前に浮かぶゲームのような選択決が。それは青年にだけしか見えないものであった。

（この選択決か？ いや早まるな。もしかしたらこいつらの選択決かもしれない。それともこっち？ ああ、もつひとつだ！ 今日の事を思い出せば何か分かるかも！）

そう思いながら、青年は今日の事を思い出し始めた

プロローグ（後書き）

すぐに投稿します。頑張ります。

第一話 能力（前書き）

ふうー やつと投稿。まえがきつて以外に書けること少ないですね。
それでは一話目です。

第一話 能力

ジリリリリ ツリリリリ

田覚ましの音が鳴る。田覚ましの設定は5時半、びつやう朝みたいだ。俺こと立花 九は意外に早起きなのだ。

(ん? 選択決か?)

起きる

起きない

寮から逃げる

(…………おこ、なんだ。この選択肢。ふざけんじやねえよ。なんだよ、寮から逃げるって!)

もちろん、皆さんなら起きる、を選択するだろう。だが

(むむ、悩むなあ。)

この選択決、最善と最悪、どちらに転ぶか分からない、といつ感じのものでできている。

まあ、時々選択肢が一つしかなかつたり、全部最悪に事が転んだりするのだが。

さて、なぜ立花がここまで悩んでいるかは、一度だけ起きないを選択したとき、クラスで人気の女子が起こしに来た、という伝説があるからである。

「やつぱつ……」

立花はそつ言いながら田原見ました顔を向けていた。その田原見ました
起きた時と同じ時間のままだった。

「俺が選択決を選んでる間は時間はなづいかないんだ。ならばー。」

そつ言いながら、立花は寝始める。

(うつじつじつじつ。それなら選択決を選ばず寝とけばいいんだよ。
)

その時、ペッとして音と共に、

起きる

起きない

寮から逃げる

勝手に選択決が選ばれていた事に気付かず……

「ふわあああ、よく寝たあ。さて選択決をつー?」

立花は虚空を驚きと絶望に満ちた顔でみつめる。

「ない!選択決がない!!いや大丈夫!我が眼前に出でよー!世界仰天不思議パワー!!」

だが出ない。

「ははは、嘘だろ……?てことは、遅刻だああああああーー急いで学校に行かなければ!」

選択決

朝飯を食べる

朝飯を食べない

そうだ、寮を出よつ

「朝飯食べる時間ねえよー!ていつか、そうだ、京都行こーう、的なノリで寮を出させよつとすんなああああああああああああああA A A A A

ああああああああああああああああ！」

途中悲鳴がアルファベットみたいな発音になつたのは気にしない方
針でいこうじゃないか！

「ん、そうだサボつてしまえば。」

朝飯を食べる

そうだ、寮を出よつ

宋林石先生集

「あれ？ こんな選択肢あつたか？ まあいいや。」

朝飯を食べる

中華書局影印

学校なんてサボつてしまえ！

「ふう、あの店うまかつたな。隠れた名店。ほかつたし。」

俺は学校をサボり外に出てから時間は経ち、夜飯を食つたところだった。選択肢に目の前の店に入る、というのがあったので、選択してみたらかなり美味しい料理店だった。

「これからもこの店行こうかな。」

そう思いながらいつも、学校に戻るルートとは違うルートで歩き出す。今日は、何故か遠回りして帰りたい気分だったのだ。

思えばこの時、選択決が出ていたのに気にせず一いちらに行つてしまつたのが人生の転機だつたのかもしれない。

選択決

いつものルートで帰る
寄り道しながら帰る

いつモノのルート　寄り道のルートも嫌な予感がすルカラ違うル
と

?.?.?.?.?.?.?.?.?.?.?.

遠?りしな?り?う

「 プハあつ。 美味い。 やつぱり コーヒーは ブラックに限るよなあ。」

立花はケータイをいじくりながら コーヒーを飲み、その上いつもとは全く違うルートを歩いていた。

人間頑張れば 3 個の事を同時にできるものなのだ。立花はつまらないことに頑張っているが。

立花はいつもと全く違うルートを歩き始めた時、重要な事に気がついた。それは、寮までの道筋が分からない、ということだった。その事に気がついた立花はケータイをとりだし、急いで地図を開いてそれを見ながら歩いているのだ。

そして、途中で見つけた自動販売機で買った コーヒーを飲み、今に

至る。

「それにしても、ほんつと選択決様様だよな。道を間違いかけたら選択決が出るじゃ。最高だよもつ。」

そつ言いながら首をかしげ、手を肩の高さまで上げた。

その時、突如頭の真横を、ゴウツー！と音を立てた明るいナニカが通り過ぎて行つた。

「アツレホ？ ゴメンネホ。君一回りよつて、そたわけジヤ、ないんだけじねホ。」

「おい！ また口調がおかしくなつてゐー！ ていうかなんだ、そたわけジヤつて！」

（おこおこお、おの数が一つ多かつたような氣もするがなんだアレは！？ ロスフレか？ ロスフレですか！ ロスフレなんですか！？）

その男は、ファンタジーを夢見る者なら一度は見たことがあるような、長い耳がついていた。

「え……エル、フ……？」

「ソ、エロフ。僕の種族はエロフだよン。」

「エロフって言つんじやない！ ちょっとアレな種族になるだりつ。」

「アレッてナーナー！ アレつて」

「え？ あ、アレはその……あれだ、あれ。」

「あれジャ分からないヨ。アレじゃ。」

「つまりだな、ああ～もう！アレはアレなのだ！だからもうあれでいいんだ！」

「コレ、何て言つんだっけ？シンデレラいや、ヨク使つてゐけどソレデハないな。ジャ、なんだろウ。」

「あ、あの？」

「「ん？ ああ、君がそういういえばイタね。」」

「ちょっと！アンタがイタね、つて言つたから私までイタね、になつてでしょ！があ～！」

「知らなイヨ！ソソ」「ト！」

「アンタ今日帰つたら日本語猛特訓！能力使つてやるわよー！」

「エツ？ チヨツ、オマツ（笑）」

「……」

「どうかした？おーい……ねえ聞いてる？」

「ああもうつ。そんなことよりアイツ、始末するわよ。」

「オーケH。」

「「つーわけで死んで？」」

「何がつーわけだ！」

「イイから死んでヨ。アソコの人みたイに、さ。」

そう言いながら、エルフの人は俺の後ろの方を指差した。

「そ、そ。」

え？ あそこの人？

そう思いながら後ろを見ると

「ひつ」

そこには、火で燃やされている、人間の首があつた。

「あ、あああ……」

無意識に俺は首からもエルフの人たちからも遠ざかつていた。

「イヤア、僕たちもサ、神々のGAMEに生き残りたくつテセア。能力者、殺そうとしたんだけど……ソイツ、自分の能力の気付いてなクツテサ、簡単ニ逃げるトコロを魔法で一発ドカン、とね。」

「そう、そしたらすぐ死んじやつたわ。」

「君も能力気付いてないのかな。」

能力……？なんだそれ。俺しらねえよそんなの。ていうか、魔法つてなんだよ。魔法はファンタジーの中だけの特権のはずだろ……ハハハ、ハハ、ハハハハハハ

人間、ここまでヤバいと笑えてくるもんなんだな。まあいい。逃げてもヤツが言うことが本当なら魔法にやられるだけだ。それならここで潔く死の

「……ちょっと、まで……」

「ハイ？」

「なつ」

「ちょっと、まで

どうして俺は奴らの言葉を信じる。神々のゲーム？なにそれ、おいしいの？な感じだよ。魔法？ただの電波かもしれない。エルフ？た

だの「スプレかもしないだろ、んなもん。

なら、何故だ？俺は特段不思議パワーは何も持つてない。それこそ仰天するようななんてあつたら、俺自分で自分を疑

仰天？不思議、パワー…………？

どこかで聞き覚えが…………！？

『ない！選択決がない！！』

違うこじやないその次だ。

『いや大丈夫！我が眼前に出でよ！世界仰天不思議パワー！…』

あつた！

そうだよあるじゃないか。俺にだつて不思議パワーが。電波なアレが！

「ク、ククククク

「今度はドウしたんでしょうか。」

「じょういかつて何？まあ、どうせ怖とかで狂つたんじゃないの？」

「狂つた？ハハまさか。」

「！！」

「ああ、そうかもしない。GAMEとか意味不明だけどさ。俺は能力もつてんのかもしない。」

だからや。もういいだろ？いい加減出してくれよ、選択決を。今危機的状況なの、分かる？分かるよね。だからマジで出してよ。もう俺GAMEとかのなんかでいいからさ。

選択決

自分で頑張つて倒す。

すばやく逃げる。

石を投げて逃げる。

クソ、いいのが全然ねえ！

（クソッ、この場合どうすればいい。どの選択決を選べば最高のイ
ベントシーンに行けるんだ！）

そう言いながら選択決と睨めっこしていた。

(「この選択決か? いや早まるな。もしかしたら「うちの選択決かも
しない。それともこっち? ああ、もうつー…… そうだ、今日の事
を思い出せば何か分かるかも!」)

そして最初に戻る。

選択決

誰かが来るのを待つ。

「え？」

「おい、ちょっと待てよ。なんで勝手に選ばれてんだよ。おかしいだろ！でも何で、何でわざわざ今までなかつた選択決があるんだ。」

「まあ何もナイミタイだし殺しちゃオウか。んジャ行くヨ？精々避けテ逃げテ泣いテ喚いテ騒いでね？D陣? p展開lo iem魔法ent de l-? qui pe m a gique — Berlin Haupt b a h n h o f ! !

「ヤツベー！」

エルフが意味不明な言葉の後にファイヤーボール言ってから、エルフが前に突き出した手のひらには、アニメなんかでよく見る魔法陣が回っていた。すると魔法陣から大人の顔より少しでかいくらいの火の玉ができていて、それを俺に向かって！――

だがその瞬間突風がエルフと俺の間で起る。その後に見たのは

「あ……。」

闇だった。

黒い帽子に漆黒のマント、黒い、なんだ？あれ。変な模様が入った鎧と革鎧が合わさったようなもの。そして下も同じような感じ。靴

は黒いブーツのようなもので、すね当たりに折りたたまれた漆黒の羽があつた。

「そこまでだ、アルス。」

「おや、魔法剣士ノ。」

どうやら声を聞くと女性のようだつた。

「どうやら戦うしかなイよウテスね。」

「当たり前だ。」

「それでは本氣を出しますか。 Sommeil 大地に dans la 睡眠
terre et de si 大地に grands 大精 esprits !
Dormir dans le 空に ciel et 睡眠 telleme
nt grand 精 靈よ ! D? ploiement de
1' ? quipe 陣 magique ! 行け !
「フン、 D? ploiement de 1' ? quipe 魔 ma

gique — Renforcement 《身体強化》 du co

rops

するところだけが嵐に包まれた。しかし、すぐに青白い光に消された。その青白い光は女性の体から発せられている。だがこれだけは分かつた。自分は助かつたのだと。あの女性が殺しに来るかもしれないが、一時的に危機は回避できたのだと。

(あれ?安心した、ら意識……が……)

そして俺は、殺されるかもしれないという恐怖と不安に包まれながら

ら意識を手放していった。

第一話 能力（後書き）

がんばるぜーちょーがんばるぜーだから見捨てないでください
おねがいします今アナタが私を見捨ててしまった場合呪われますが
よろしいのですか？えそんなことをいわれたから逆に見捨てる？そ
んなあー！神は死んだ！

といつわけです。見捨てないでくださいお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2128y/>

GAME（ゲーム）～神々の遊楽～

2011年11月7日14時04分発行